

## 「平和の俳句 16」

2016年04月01日

「東京新聞」の「平和の俳句」は社会現象の一つになって来た感がある。現代俳句の黛まどか氏が選者に加わった。女性の視点からの平和の俳句に期待している。心に残る句を紹介し、私なりの感想を書きたい。

「命かけ母は貴方（あなた）を生んでいる 小西照子（75歳）」<金子兜太 出産は命がけで生命を生むこと。母のご苦勞を思え。> <いとうせいこう 子供を持つ女性の思いはほぼひとつだろう。ゆえに貴方はかけがえない。> 母は命がけで子どもを生む。そして、生まれてきた子どもには幸いをひたすら望む。戦死など、考えもしない。与謝野晶子の「君死にたもうことなかれ」を思い出す。「あゝをとんとよ、君を泣く、君死にたまふことなかれ、末に生れし君なれば 親のなさはまさりしも、親は刃（やいば）をにぎらせて 人を殺せとをしへしや、人を殺して死ぬよとて 二十四までをそだてしや。」反戦歌として最高である。

「入り口も出口も見えず原発忌 横井隆和（72歳）」<いとうせいこう 出口はおろかり口も、というのが胸に迫る。なぜそれが起こったかさえわからないし、知らされない。明らかにしてほしい。> 原発が作られていることは、もちろん知っていたが、54 基も作られているとは知らなかった。気がついたら、戦争になっていた状況と同じではないか。原発を稼働させようとする経済優先の考えと命と環境を守り、将来に禍根を残してならないとする考えのせめぎ合いが展開している。福島原発事故の被災者支援はおざなりである。原因究明、処理の見通しも全く見えていない。それなのに再稼働、外国への売り込みなど、あってはならない。放射能を現代科学で処理できない「核」は人間が扱ってはならないとすべきである。

「置炬燵（おきごたつ）戦死の父の額の下 高橋弘光（77歳）」<黛まどか 戦死した父の記憶は臍（おぼろ）げだが、家族が集う居間でいつも遺影が見守ってくれている。炬燵を囲む家族が増える幸せを感謝する作者。> 「『生きてみたなら』と指折り日向（ひなた）ぼこ 遠山剛（たけし）（87歳）」<黛まどか 日向ぼこをすると幼くして原爆で亡くなった友を思い出す。生きていたら…指を折って死者の歳（とし）を数え偲（しの）ぶことは祈りそのものである。> 私の長兄は敗戦時、14歳の旧制中学生だったので、兄弟には戦死者はいない。母方の親戚の家々に行くと、居間に軍服を着た青年の写真が並んでいた。戦死した年長の従弟たちである。彼らの願いはただ一つ「平和」である。上記の句を読みながら、伯父伯母たちは「生きていたら」と指を折って歳を数えていたのではないかと思う。

「我々は丸裸だった過去がある 稲本八重子（80歳）」<金子兜太 作者は「戦争と伊セ湾台風でございます」と添え書き。諧謔（かいぎやく）の味。> <いとうせいこう 八十歳女性の、骨太な一句。その過去を忘れることなかれとの強い言葉だ。> 私たち家族は敗戦を迎え満州から引揚げるとき、家財道具を道端に並べて売った。残りの荷物を持って帰る途中、ソ連兵たちから荷物を検閲され、良さそうな物を全部取られてしまった。丸裸で帰国したのである。その時、父は46歳で、何もないところから家族7人の生活が始まった。才覚のない父は体を打ち叩いて、子ども5人を育てた。両親にただ感謝である。

「今現（げん）に九条貫く天皇あり 斎藤信子（66歳）」<金子兜太 潔い句だ。作者の気持ちの込め方も、その対象の天皇のお姿も言動も、まことに潔い。今次大戦を深く悔いて、平和を願う天皇皇后。> 天皇皇后は人柄が優しく、9条を尊重する意志を持っておられるようだ。しかし、天皇の行動と言葉の報道が多過ぎる。国の意思決定は天皇ではなく、国民である。天皇のために生き、死ぬことを至上の価値とされた過去があったことを忘れてはならない。